

I-3 船内余暇時間の過ごし方と船内施設

目 次

A. 調査の実施と結果	22
B. 若干のまとめ	30

A. 調査の実施と結果

1. 調査の目的

船内のレクリエーション活動については、いままで、船内生活の一環として調査が行われ、それなりに実態が把握されてきたが、「今後の船内レクリエーションを如何にしたらよいか」という課題にせまるには、船内レクリエーション活動の実態を体系的にとらえるとともに、その阻害要因を知る必要がある。今回の調査は、船内余暇時間の過ごし方、船内の物的施設、設備の利用状況とその阻害要因に焦点を合せて実施した。

2. 調査対象

船内レクリエーション活動の実態を調査するといっても、レクリエーション活動は、種々の要因によって異なることが考えられる。今回は、一航海期間の長短（就航航路）、船種、建造年月、船内レクリエーション設備の状況等の要因を加味して、表1に示すような外航労務協会に所属する11隻を対象にして行なった。船種別にみると、タンカー4隻、コンテナ船3隻、撤積船2隻、一般貨物船2隻であり、1航海期間は、豪州、カリフォルニア航路のように、1ヶ月前後と短期間の船から中南米西岸、地中海、三国間航路のように長期間の船までふくめた。

なお、対象船のレクリエーション施設および設備をまとめると表2のようであった。

3. 調査時期

昭和51年11月から52年3月にかけて実施した。各船ごとの調査時期は、調査表の配付時点、あるいは、配付された調査表の記入開始時点が船の動静によって左右されるため異なっている。

4. 調査方法

調査は、一般に乘組む全員を対象にした。そのうち、船内余暇時間の過ごし方についてはなるべく連続した長期間にわたって容易に記入でき、その間記入者の負担をできるだけ軽くし、かつ記入の信頼性を高めるという3つの条件を満足するように考え、余暇時間の時間、あるいは、余暇時間を過ぎた行為ごとの時間など時間量を捨象して、行為のみに注目して行なった。記入期間は、船内生活の動態を考慮すれば、1航海期間をおさえるべきであるが、今回は、30日間連続して行りに留めた。（1航海期間が30日未満の船にあっては、その航海が終了するまでとした。）なお、調査表の配布・回収は、船内レクリエーション委員、あるいは文化委員の手を借りて行ない、航海が長期にわたる場合には、途中の寄港地より内地に郵送する方法をとった。

5. 有効資料

調査表は、表3に示すように、11隻の乗組員319名に配布した。そのうち回収した数は314名であり、回収率を求めると98%強となり、非常に良い成績であった。回収した調査表の内容についても長期間にわたる記入であったが、記入もれは少く、大部分の資料を使って分析した。（延9,012人日）

表1. 調査対象船

船名	船種	総トン数	建造年月	就航路	乗組員数	調査期間
A	タンカー	130,670	昭和 49. 4	ペルシヤ湾	32	S51.11.15~ 12.14 (31日間)
B	コンテナ	23,766	47. 4	カリフォルニア	26	S51.11.27~ 12.20 (24日間)
C	撤積	65,307	45. 7	豪州・ポートダンピア	26	S51.11.20~ 12.12 (23日間)
D	コンテナ	23,669	44. 6	豪州	26	S51.11. 2~ 12. 1 (30日間)
E	タンカー	136,089	50. 2	ペルシヤ湾	30	S51.12.10~S52. 1. 8 (30日間)
F	タンカー	116,364	50. 3	ペルシヤ湾	28	S51.12.10~S52. 1. 8 (30日間)
G	撤積	100,470	51. 8	南アフリカ	25	S52. 1.11~ 2. 9 (30日間)
H	コンテナ	30,922	49. 9	地中海	27	S52. 1. 1~ 1.30 (30日間)
I	一般貨物	9,000	45. 9	中南米西岸	34	S51.12.20~S52. 1.18 (30日間)
J	タンカー	129,508	51.	三 国 間	32	S52. 1. 1~ 1.30 (30日間)
K	一般貨物	7,718	45.10	インド・パキスタン ペルシヤ湾	33	S52. 2.11~ 3.12 (30日間)

表2. 対象船の船内レクリエーション施設および設備

船名	レクリエーション・ルーム			ゴルフ室	ゲーム ルーム	プー ール	積込用具
	娛 楽	室	体 育 室				
A	○		○	○			17種
B	○		/				12
C	○		○				22
D	○		○				10
E	○		○		○		16
F	○		○			○	18
G	○		○				14
H	○		○				18
I	○		/				10
J	-		-	-	-	-	-
K	○		/				14

表3. 調査対象者

船名	乗組員数 (配布数)	回収数	20才 未満	年								不明	
				20~ 24	25~ 29	30~ 34	35~ 39	40~ 44	令 45~ 49	50~ 54	55才 以上		
A	32	32	4	13	4	2	2	2	2	1	2	0	2
B	26	24	0	0	4	1	6	2	4	4	4	0	3
C	26	26	0	3	1	2	5	2	8	4	4	0	1
D	26	26	0	0	4	3	5	4	4	3	1	1	2
E	30	30	2	8	8	2	3	1	2	1	1	1	2
F	28	28	1	7	4	2	2	2	1	3	0	0	6
G	25	25	0	1	5	2	5	5	2	5	0	0	0
H	27	26	0	1	4	3	3	6	5	0	4	0	0
I	34	34	0	4	9	5	4	3	1	4	4	0	0
J	32	30	0	3	6	4	2	4	8	3	0	0	0
K	33	33	1	1	7	1	6	5	6	4	2	0	0
計	319	314	8	41	56	27	43	36	42	33	12	16	
		(98.4%)	(2.5)	(13.1)	(17.8)	(8.6)	(13.7)	(11.5)	(13.4)	(10.5)	(3.8)	(5.1)	

表 4. 船別の主な船内余暇の過ごし方

船名 順位	A丸	B丸	C丸	D丸	E丸	F丸	G丸	H丸	I丸	J丸	K丸
1	雑談	読書	読書	読書	麻雀	音楽鑑賞	読書	読書	読書	読書	読書
2	読書	雑談	軽い体操	休息	読書	読書	麻雀	休息	雑談	麻雀	麻雀
3	麻雀	麻雀	雑談	雑談	雑談	雑談	休息	雑談	休息	休息	V.T.R
4	休息	休息	V.T.R	軽い体操	音楽鑑賞	麻雀	雑談	麻雀	麻雀	軽い体操	雑談
5	音楽鑑賞	音楽鑑賞	休息	麻雀	休息	軽い体操	軽い体操	音楽鑑賞	音楽鑑賞	雑談	休息
6	軽い体操	強い	音楽鑑賞	音楽鑑賞	軽い体操	休息	パーティー	軽い体操	軽い体操	V.T.R	魚つり
7	卓球	V.T.R	卓球	勉強	V.T.R	ゴルフ	音楽鑑賞	パーティー	V.T.R	パーティー	音楽鑑賞
8	V.T.R	軽い体操	卓球 自転車 (ビュートイ サイクル)	散歩	魚つり	魚つり	V.T.R	勉強	散歩	卓球	パーティー
9	勉強	テレビ	パーティー	パーティー	勉強	V.T.R	勉強	散歩	パーティー	音楽鑑賞	軽い体操
10	魚つり	散歩	ラジオ体操	V.T.R	ボクシング バンチ	勉強	ゴルフ練習	自転車 (ビュートイ サイクル)	勉強	勉強	わなげ
10位までの 累積百分率	80.4%	83.7%	86.6%	88.2%	82.5%	86.8%	87.4%	88.9%	87.7%	90.5%	84.0%
出現行動数	33	24	30	24	32	32	26	28	25	24	24

表 5. 職種別にみた船内余暇

職種 順位	船長 (11)	航海士 (33)	機関長 (11)	機関士 (30)	通信長 士 (20)	甲板部 員 (84)	機関部 員 (56)	事務部 員 (48)
1	読書	読書	読書	読書	読書	読書	読書	読書
2	雑談	休息	軽い体操	雑談	休息	雑談	雑談	休息
3	軽い体操	麻雀	雑談	麻雀	雑談	麻雀	麻雀	雑談
4	休息	雑談	麻雀	休息	軽い体操	音楽鑑賞	軽い体操	麻雀
5	音楽鑑賞	軽い体操	休息	音楽鑑賞	麻雀	休息	休息	音楽鑑賞
6	麻雀	音楽鑑賞	散歩	軽い体操	勉強	V. T. R	音楽鑑賞	V. T. R
7	勉強	勉強	勉強	V. T. R	音楽鑑賞	軽い体操	V. T. R	軽い体操
8	卓球	V. T. R	音楽鑑賞	パーティ	魚釣り	パーティ	勉強	勉強
9	ゴルフ練習	パーティ	V. T. R	勉強	パーティ	魚釣り	パーティ	パーティ
10	散歩	ゴルフ練習	ゴルフ練習	卓球	卓球	ゴルフ練習	散歩	魚釣り
10位までの 累積百分率	76.3%	85.3%	79.1%	72.2%	84.2%	84.0%	82.0%	86.0%
出現行動数	31	36	28	34	33	35	34	41

(註) 1. カッコ内数字は人数。

2. 上記職種のほか、事務長・員3名、船長1名がいるが、人数がすくないため除いた。

表 6. 年齢階層別にみた船内余暇

年齢階層 順位	20才未満 (8)	20才代 (98)	30才代 (70)	40才代 (78)	50才以上 (45)
1	音楽鑑賞	読書	読書	読書	読書
2	雑談	雑談	雑談	雑談	軽い体操
3	読書	音楽鑑賞	休息	休息	雑談
4	V. T. R	麻雀	麻雀	軽い体操	休息
5	麻雀	休息	軽い体操	麻雀	麻雀
6	休息	V. T. R	パーティ	音楽鑑賞	V. T. R
7	バーベル アレイ	軽い体操	V. T. R	V. T. R	散歩
8	魚釣り	パーティ	音楽鑑賞	パーティ	音楽鑑賞
9	卓球	勉強	勉強	勉強	勉強
10	軽い体操	卓球	魚釣り	散歩	魚釣り
10位までの 累積百分率	85.4%	85.5%	81.1%	81.1%	81.2%
出現行動数	26	42	38	44	33

表7 船内余暇行動の多様性（余暇行動数からみた）

行動数	A丸	B丸	C丸	D丸	E丸	F丸	G丸	H丸	I丸	J丸	K丸	計
1	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	
2					1							1
3				2								2
4	1			1		1			3			6
5			2						1			3
6	1	2		3		2	1		1	1	1	12
7		2	1	1	2	2		5	4	3	2	22
8	3	3	1	3	2	1	1	2	4	2	2	24
9	5	2	5	5	1	4	4	4	3	5	2	40
10	3	4	2	6	2	1	5	3	4	4	5	39
11	1	3	5	2	2	2	6	2	5	4	2	34
12	7	5	2	2	5	6	4	2	3	7	3	46
13	3	2	2	1	1	2	2	1	3		2	19
14	3	1	2		7	2	1	2	1	1	2	22
15	1		2		4	1	1	3	1	2	8	23
16			1		1	3		1	1	1	1	9
17	2										2	4
18			1		1	1						3
19												
20											1	1
21	1				1							2
22	1											1
1 船の行動数	33	24	30	24	32	32	26	28	25	24	24	
平均行動数	14	10	11	9	16	13	10	15	10	11	12	

B. 若干のまとめ

船内余暇行動は、11隻の船にあって59種あったが、特定の行動に集中する傾向がみられ、「読書」、「雑談」、「休息」、「麻雀」「音楽鑑賞」、「軽い体操」、「V.T.R.」、「パーティ」、「散歩」、「魚つり」、「卓球」、「ゴルフ練習」、「自転車(ビューティサイクル)」の14種目で全余暇行動の90%を占めている。なかでも「読書」、「雑談」、「休息」の3行動に集中する割合は大きい。(全余暇行動の半分を占める)。これらの余暇行動についてまとめてみよう。

① 陸上生活者の余暇行動が平準化するなかで、船内においても、職種、あるいは職位という職階による格差はなくなっていると考えられる。このように、空間的には陸上と隔絶された形態をとりながらも、陸上とのつながりが濃厚にみられる。以前に比べて休暇日数が増加したことを考えると、今後ますますこの傾向が強くなっていくと考えられる。

② 年齢階層でみるならば、若者は、「音楽鑑賞」、「バーベル・アレイ」にみられるように、若者としての船内余暇の過ごし方があり、高令者には、自分の健康維持に気を配りながら、「軽い体操」、「散歩」と積極的に身体を動かすといった特徴がみられる。

③ 1航海期間が短い船の余暇行動は、多様性がすくなくなり、特定の行動に集中する傾向がみられる。三国就航船の余暇行動は、1航海が長期であるにもかかわらず、短期間の船と同じような傾向にある。内地を離れた長期航海ということと考え合えると、より強力なバックアップ体制を行わなければならないであろう。

④ 余暇施設が改善された船は、それなりに、施設利用が多くなり、行動がより多様的になっている。少人数ではあるが、施設利用もせず、行動に多様性がないグループの存在が気にかかる。(多様性があるからといって、余暇時間の内容が良いと単純に判定はできないが)。

⑤ 設備についても設備が多くなれば、それらを利用した行動がふえるものの、出現頻度は顕著に増えるということもない。設備利用は、「きらいである、好みに合わない」、「できない」主体側の選択であるが、1船の乗組員数が減少していくなかで、「仲間がいない」理由によってできないという新たな局面を生みだしている。

⑥ 今回は、具体的に分析結果を記さなかったが、レクリエーション委員あるいは文化委員の立場からの自由意見のなかで「委員の構成メンバーのかたより、固定化が、活動の新たな活動展開を阻害している」、「縦型社会のなかで、管理的立場にある人の理解を求める」あるいは「委員会活動に対する積極的援助 — 具体的には、物品の購入、手配に対してを求める」意見が多くみられた。

以上、種々の側面からみた問題点を列挙してきたが、船内余暇の過ごし方、あるいは、広義にとって船内レクリエーションの在り方について新たな局面を迎えているのではないだろうか。そこには、単に積込む設備を増やせばよい、あるいは施設を充実すれば良いというのではなく、施設、設備のはたす機能を考えての導入が必要であろうし、利用する側からは主体性の確立が求められている。そこには単に施設、設備を利用するにとどまらず創作的活動の展開の場として考える必要がある。また、船内集団を単に技

術者の集団と考えるのではなく、1つのコミュニティを形成していると考えよう。
(昭和51年度「船員福祉の理念とその具体策

の調査研究」、第Ⅳ編、担当者、篠原陽一、服部昭、広田彌生のうち、執筆者、服部昭の要約である)。